

異分野融合による総合書物学の拡張的研究・国文研ユニットの活動紹介

木越 俊介・松永 瑠成

「総合書物学」は2022年度に始動し、6年間にわたり館内外の複数分野にまたがる研究者・院生10数名をメンバーとして研究を推進するプロジェクトである。

具体的な研究内容としては、AIによるパターン学習の技術を用いることにより、嵯峨本における活字の組み方（組成）と版面を情報工学的に解析し、タイトルごとの精緻な書誌情報の集積を目指すことを一つの柱としている。この過程で、任意に文字入力をすれば適宜嵯峨本の活字に変換して出力される「そあん（soan）」というサービスもリリースされ、今後のくずし字学習やデジタル画像の活用事例として高い注目を集めている。また古活字版のグリッド解析を通して文字配列の美しさの解明に迫る試みや、古典籍のデジタル画像を比較するビューアを用いた同版・異版の調査も実施している。

このように、当プロジェクトでは新たな時代のデジタル・ヒューマニティーズの成果を適宜取り込みつつ、従来の国文学研究の方法とは異なるアプローチによる実証性を探求している。

これらに加え、デジタル画像上ではもっぱら平面として把握されてきた古典籍を、改めて立体物として撮影する取組も進めている。たとえば表紙の文様などは、古典籍を立体的に閲覧できれば格段に理解度が高まるはずである。将来的には、こうした新たなデジタル情報を付加・実装することにより、画像データベースの価値そのものを高めていくものとして期待される。

以上のことは総研大における授業科目「総合書物論」の授業内容とも連動しており、最先端の実験的な試みや方法論などを教育において伝えていくことも当プロジェクトの大きな特色である。

「総合書物学」では活動・成果を研究者コミュニティや周辺領域に周知すべく既に公開シンポジウムを開催しているが、今後はさらに海外への情報発信も積極的に行いたいと考え、今回インフォメーション・ミーティングにエントリーする次第である。